

フランス語における言語構造の変換

— 歴史言語類型論の視点から —^{*}

今田良信

0. 研究の背景と本稿の目的

言語類型論は、J. H. Greenberg の語順類型論以降、形態論的視点からのみの分類による19世紀の古い類型論とは一線を画し、音韻・形態・統語・意味など多面的な基準（パラメータ）による分析が行われ、W. P. Lehmann, T. Vennemann, J. A. Hawkins らを経て、近年はさらに一段と飛躍を遂げ、B. Comrie, L. J. Whaley などを始めとして益々盛んに研究が行われている。しかし、これまでの言語類型論は、言うまでもなく共時的な研究分野であった。

本稿題目にある「歴史言語類型論」とは、筆者の造語であり、共時的研究の枠組みである言語類型論に、時の経過に伴う言語変化の様相をも加え、通時的視点を融合させた新しい言語分析の枠組みの構想である。文法範疇や文法事項などのパラメータについて、同一言語内の2つの共時態（体系）間の変化の様相を観察し、その結果を2つ（以上）の言語間で比べてみれば興味深いのではないかとの着想から出発したものである。さらに、言語構造の変化（変換）の型（パターン）によって諸言語を類型化することができないかとも考えている。そこで、その手始めとして、今田(2009)において、フランス語をモデルとし、同一言語内のかなり時間的隔たりを持った2つの体系（具体的には、古フランス語と現代フランス語）間で、いくつかのパラメータについて、どのような値（特徴）の相違が見られるのか、あるいは見られないのか、また、見られるとすれば、それはどのような種類の、どの程度の開きを持った相違であるのかを調べてみた。

本稿の目的は、今田(2009)において、相違が見られると確認されたパラメータの項目について、1つ1つの相違が、フランス語の2つの体系間で、それぞれの当該文法範疇や文法事項の中にどのような言語構造上の変換をもたらすものであったかを明らかにすることである。

1. 巨視的パラメータと微視的パラメータ

本稿では、今田(2009)と同様に、パラメータというものを二段構えで考えている。すなわち、各パラメータについて2つの体系を比べる際、同一言語内のことであるので、巨視

的に(macroscopically) (=言語を捉える上での大きな網目で) 比べるだけでは、パラメータとなる項目に関する特徴の相違を感知できない、或いは、感知しがたいことが多いのではないかと予測し、当然のことながら、微視的に(microscopically) (=言語を捉える上での小さな網目で) も観察してみる必要があるのではないかと考えたのである。そこで、次節で少し説明するが、安藤(1987)と古浦(2008)を参考にして立てた25項目のパラメータを「巨視的(に比べる)パラメータ」としている。これに対し、「微視的(に比べる)パラメータ」とは、1つ1つの「巨視的パラメータ」をさらに細かく吟味する視点を指す。例えば、その言語に「冠詞が有るかどうか」というパラメータの場合、これは巨視的なものであるが、「冠詞が有る」という値を取る場合に、(1)その内容が「不定冠詞と定冠詞が有る」のか「不定冠詞、部分冠詞、定冠詞が有る」のかという違いや、(2)「不定冠詞、部分冠詞、定冠詞が有る」場合でも、3種類の冠詞の果たす機能が「(ほぼ)同じ」なのか「(かなり)異なる」のかという違いは微視的なものということになる。どの程度まで細かく見るかは、パラメータによって異なるが、同一言語内の2体系間の場合には、(1)だけでなく(2)のレベルまで細かく観察する必要が出てくるのではないかということである。

2. 今田(2009)で得られた結果について

上述のように、今田(2009)では、安藤(1987)と古浦(2008)を参考にし、それに修正を加えて25項目の(巨視的)パラメータを立て¹⁾、便宜的に3つの判断基準で古フランス語と現代フランス語の間の異同を調べてみた。

◎印：巨視的にも微視的にも概ね共通すると判断される場合

○印：巨視的には共通すると見なされるが微視的には相違する事例が散見される場合

●印：巨視的にも異なると判断される場合

但し、古フランス語における、特に発音、音節、アクセントなど音声面に関する特徴については、当時の状況をそのまま再現することは厳密には不可能である。従って、主要な諸特徴について文法書等で一般的に認められている範囲でしかその判断ができないことを断っておきたい。その結果、

①25項目のうち、◎印の項目が17種(項目数全体の68%)、○印の項目が4種(項目数全体の16%)、●印の項目が4種(項目数全体の16%)で、両体系間に何らかの変化が見られる項目が3割を越える。

②変化は、統語法を中心とした文法項目や文法範疇(冠詞、語順、省略、格など)に関わる項目に多く見られる。

という結論が得られた。何らかの変化が見られると判断された項目は次の通り(各項目の頭の番号は、今田(2009)で25項目中の何番目かを示すもの)。

○印の項目：

7. 冠詞が有るかどうか。

- 11. S, V, Oによる基本語順はどうか。
- 16. 比較構文〔における「比較の対象」, 「比較の補語」〕に何が用いられるか。
- 20. 疑問詞が文頭に置かれるかどうか。

●印の項目：

- 12. 主要語〔＝被修飾語〕と修飾語との語順はどうか。
- 17. 疑問文が何でマークされるか。
- 23. 主語(人称)代名詞が省略されるかどうか。
- 25. 名詞・代名詞について文法範疇としての格(case)が有るかどうか。

3. 2体系間における言語構造の変換とは

前節において、古フランス語と現代フランス語の間で特徴の相違が認められたパラメータの項目について、その相違の1つ1つが、2体系間の当該文法範疇や文法事項全体の中で、具体的にどのような言語構造の変換をもたらしたのかを吟味する前に、「2体系間における言語構造の変換」とはそもそもどのようなものを指すのかについて、説明しておく必要があろう。

〔表2〕現代フランス語の指示形容詞

	<i>m</i>	<i>f</i>
<i>sg</i>	ce(cet)	cette
<i>pl</i>	ces	

〔表1〕古フランス語の指示(形容～代名)詞

		<i>m</i>		<i>f</i>	
		近 称	遠 称	近 称	遠 称
<i>sg</i>	<i>cs</i>	cist	cil	ceste	cele
	<i>cr</i>	cet	celui		
<i>pl</i>	<i>cs</i>	cist	cil	ces	celes
	<i>cr</i>	ces	ceus		

〔表3〕現代フランス語の指示代名詞

	<i>m</i>	<i>f</i>
<i>sg</i>	celui	celle
<i>pl</i>	ceux	celles

本稿で取り扱うパラメータ項目ではないが、〔表1〕～〔表3〕をご覧いただきたい。〔表1〕²⁾は古フランス語の指示(形容～代名)詞を、〔表2〕は現代フランス語の指示形容詞を、〔表3〕は現代フランス語の指示代名詞を示す表である(なお、略号はそれぞれ

れ, *sg*: 単数, *pl*: 複数, *cs*: 主格, *cr*: 非主格 (=被制格), *m*: 男性〔形〕, *f*: 女性〔形〕を示す)。これら3つの表から判断すれば, 現代フランス語の指示詞には形容詞と代名詞の形に区別があるが, 古フランス語ではその違いは未分化であることが分かる。一方, 古フランス語には「近称」と「遠称」, すなわち「近さ」と「遠さ」の違いを語形によって示すという, 現代語には無いやり方の指示詞の区別が見られるが, 両体系の語形から判断すれば, この古い機能上の対立は, 形容詞であるか代名詞であるかという新たな機能上の対立に組み換えられていると見て取れる。このような体系によって異なる範疇化の変化のことを, 本稿では「2体系間における言語構造の変換」と呼ぶことにする。但し, これは個々の文法範疇や文法事項によって説明が必要となることは言うまでもない。

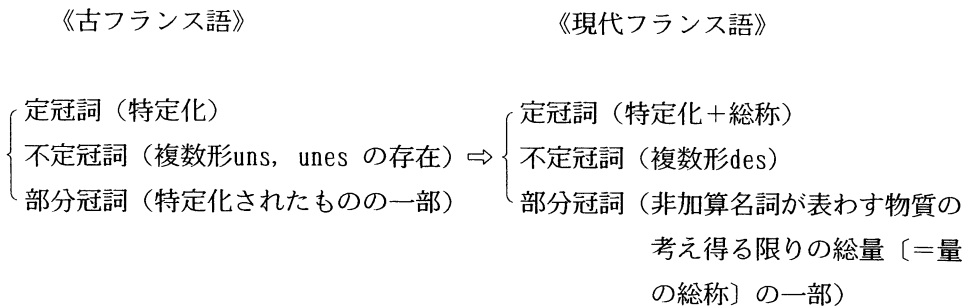
4. 2体系間における言語構造の変換の具体例

今田(2009)において, 古フランス語と現代フランス語の間で特徴の相違が認められたパラメータの項目について, 2. に挙がっている番号順に, その相違が, 2体系間の当該文法範疇や文法事項全体の中で具体的にどのような言語構造の変換をもたらしたのかを検討してみたい。なお, ●印の項目の17と○印の項目の20は1つにまとめて, 「疑問文の構造の変換」として扱うことにする。

4. 1. 冠詞の構造の変換

「7. 冠詞が有るかどうか」については, 今田(2009)では, ○印で「古フランス語にも現代フランス語にも冠詞が有る」となっている。◎印となっていないのは, 1. で例として挙げたように, 巨視的には両体系ともに冠詞が存在し, さらに, 微視的にも(1)レベルでは両者とも不定冠詞, 部分冠詞, 定冠詞の3種類の冠詞が有りはするが, (2)レベルでは, 各種冠詞の果たす機能がかなり異なっており, 微視的には相違する事例が散見されるからである。紙幅の都合で, ここでその機能分担の変化について精緻な説明はできないが, 冠詞に関する両体系間の構造の変換は, 一応〔図1〕のように示しておく。

〔図1〕

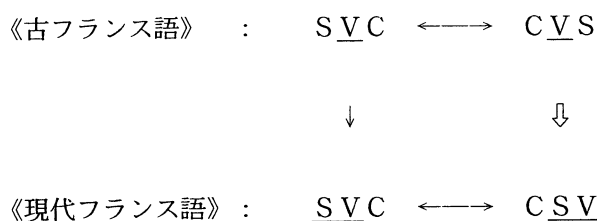


4. 2. 平叙文の語順構造の変換

「11. S, V, Oによる基本語順はどうか」については、今田(2009)では、○印で「古フランス語も現代フランス語もSVO言語である」となっている。◎印となっていないのは、巨視的には両体系ともに基本語順は同じSVOであるのだが、微視的には両者の基本語順の価値が、それを取り巻く語順体系内全体の状況の相違によって大きく異なるからである。すなわち、古フランス語は、いわゆる「動詞第2位」が原則の語順であったのに対し、現代フランス語は、動詞活用語尾の実質的磨滅に代わって接頭辞的機能を担うに至った人称代名詞主語のSの働きをもその中に含めたSVが定置化された語順であるという点だが、両語順体系の根本的相違であり、それによりSVOという基本語順の価値も必然的に異なることになり、これを見過ごしにすることはできない。従って、平叙文の語順構造の変換は〔図2〕のように示すことができる。なお、図の中の↓の箇所のみが実際に変化した部分であり、それだけで別の体系を生ぜしめたことになる。詳しくは、今田(2002c)をご覧ください。

〔図2〕

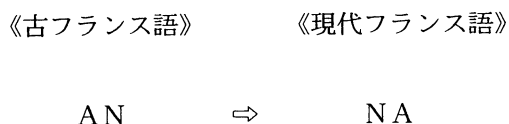
〈基本語順〉



4. 3. 修飾語と主要語の語順構造の変換

「12. 主要語〔=被修飾語〕と修飾語との語順はどうか」については、●印で「古フランス語では「修飾語+主要語」の語順が一般的であるが、現代フランス語では「主要語+修飾語」の語順が基本である。但し、それぞれ逆の語順も用いられる」とされている。詳しくは今田(2009)をご覧ください。要するに主要語をN、修飾語をAとすれば、巨視的に見ても、両者の原則的位置は真逆と見ることができ、従って、語順構造の変換は下記の〔図3〕のように示すことができよう。

〔図3〕



4. 4. 比較構文における比較の補語に関する構造の変換

「16. 比較構文〔における「比較の対象」, 「比較の補語」〕に何が用いられるか」については, ○印で「古フランス語では比較構文に接続詞(que)または前置詞(de)が用いられる。現代フランス語では接続詞(que)または前置詞(à) が用いられる」とされている。ただ, 現代語の前置詞 àはplusを用いずそれ自体ですでに比較の意味を含んでいる形容詞の場合に限って用いられるだけなので, 一応考慮外とすれば, 現時点ではまだ便宜的であり, 今後修正の可能性はあるものの, 比較の補語に関する構造の変換としては, 〔図4〕のような示し方が考えられよう。

〔図4〕

《古フランス語》

《現代フランス語》

接続詞 que+補語となる文

前置詞 de +補語となる代名詞・名詞

⇒ 接続詞 que+補語となる

文～代名詞・名詞

4. 5. 疑問文の構造の変換

疑問文に関して, 先ず「17. 疑問文が何でマークされるか」については, ●印で「古フランス語では疑問文は倒置によってマークされるのが通例であるが, 現代フランス語では(1)音調(文尾を上げる) [=抑揚], (2)文頭のest-ce que, (3)倒置のいずれかによってマークされる」とされている。また, 「20. 疑問詞が文頭に置かれるかどうか」については, ○印で「古フランス語では疑問詞は文頭に置かれるのが基本であるが, 現代フランス語では必ずしも文頭には置かれるとは限らない」とされている。

このフランス語における疑問文の構造の変換については, 今田(2010b)に詳しく述べられているのであるが, 先ず, その拙論の中でも示した〔表4〕³⁾をご覧ください。そして, この〔表4〕をもとに, 今田(2010b)に因って疑問文の構造の変換を2つの面から分析してみたい。

第1は, SとVによる語順の違いの面からの分析である。すなわち, 通時的に見ると, 古フランス語に比べて現代フランス語は, 全体疑問文と部分疑問文の両方において, 文頭にせよ, 文中にせよ, 文尾にせよ, SVを定置化したまま(=倒置せずに)疑問文を作るという傾向を強くしていることが見て取れる。そして, このことは, 先に4. 2. でも触れたが, 今田(2002c), pp. i-ii: 「この語順変化(SVC, CVS⇒SVC, CSV〔補足筆者〕)は, 古フランス語から現代フランス語への体系の変化全体として捉えれば, 動詞第2位の語順から, Vidos(1965)が指摘しているように動詞活用語尾の実質的磨滅に代わって接頭辞的機能を有するようになった人称代名詞のSの働きをもその中に担う, SV

が定置化された語順への動きと見ることもできよう。」という指摘とも矛盾無く合致していると言えよう。

〔表4〕タイプごとに見たフランス語の疑問文

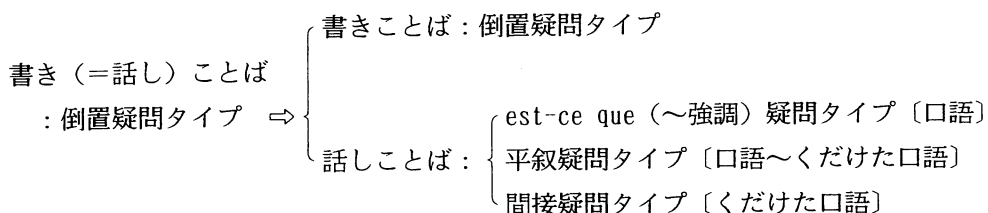
		《古フランス語》	《現代フランス語》
全 体 疑問文	①平叙疑問タイプ	不使用？	→使用（口語）
	②Est-ce queタイプ	不使用	→使用（口語）
	③倒置疑問タイプ	使用（原則） 〔名詞主語・代名詞主語 ともに単純倒置のみ〕	→使用（書きことば中心） 〔代名詞主語は単純倒置、 名詞主語は複合倒置〕
部 分 疑問文	①平叙疑問タイプ	不使用	→使用（くだけた口語）
	②強調疑問タイプ	使用（まれ）	→使用（口語）
	③倒置疑問タイプ	使用（原則） 〔名詞主語・代名詞主語 ともに単純倒置のみ〕	→使用（書きことば中心） 〔代名詞主語は単純倒置、 名詞主語は複合倒置およ び単純倒置もあり〕
	④間接疑問タイプ	不使用（基本的に）	→使用（くだけた口語）

第2には、文体や言語使用のレベルの違いの面からの分析である。すなわち、文法書、等の記述も含めて、古フランス語においては、倒置疑問タイプが原則で、それ以外のタイプはほとんど未発達であり、結果として、話しことばと書きことばの両方が形式的に未分化であったと言えよう。一方、現代フランス語では、倒置疑問タイプの他に3つの新しい

〔図5〕

《古フランス語》

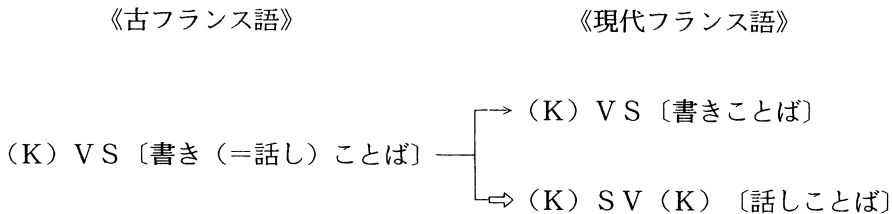
《現代フランス語》



タイプが発達してきたが、そのことが、話しことばと書きことばの間に形式的な分化の傾向を生み出し、書きことばは倒置疑問タイプ、話しことばはそれ以外のタイプ（est-ce que(～強調)疑問タイプ、平叙疑問タイプ、間接疑問タイプ）というような、タイプによる役割分担が生じてきているという状況にある。これを図示すると、〔図5〕の通りである。

さらに、第1の面と第2の面を統合して、全体疑問も部分疑問も含め、SとVの語順、疑問詞の位置、話しことばと書きことばの区別のみを単純化して、最終的に、疑問文の構造の変換を図示すれば、〔図6〕のようになろう（なお、()は、疑問詞について、有無の選択および2者間の択一を、⇔は、主要な発展を示す）。

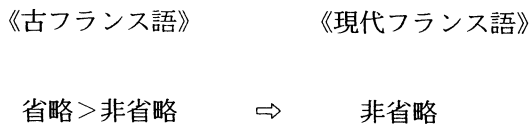
〔図6〕



4. 6. 主語人称代名詞の省略構造の変換

「23. 主語人称代名詞が省略されるかどうか」については、●印で「古フランス語では主語代名詞はしばしば省略されるが、現代フランス語では省略されない」とされている。主語人称代名詞は、古フランス語では、特に主語を強調する時以外は用いないのがふつうで、表現されることは少ないが、現代フランス語では、動詞の主語としてしか用いられず、名詞（相当語句）が主語である場合を除き、必ず動詞に先立てられる。従って、主語人称代名詞の省略構造の変換は〔図7〕のように示すことができる。

〔図7〕

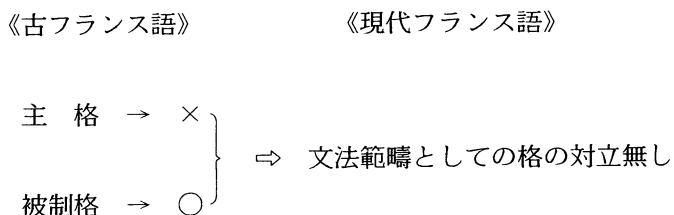


4. 7. 文法範疇としての格構造の変換

「25. 名詞・代名詞について文法範疇としての格が有るかどうか」については、●印で「古フランス語には名詞・代名詞について文法範疇として主格と被制格の2格の対立があったが、現代フランス語にはその格の対立は無い」とされている。現代フランス語の代名詞については、一部その痕跡が残ってはいるものの、基本的に格の対立は無くなっている。

従って、文法範疇としての格構造の変換を図示すれば、〔図8〕の通りである。

〔図8〕



5. 結語

以上、今田(2009)で扱ったいくつかのパラメータ項目のうち、古フランス語と現代フランス語の2体系間で文法上の範疇化の違いが認められるものについて、その言語構造の変換がどのようなものかを分析し、その変換の型をできるだけ明示的に図示し、類型化のモデルとなるように努めてみた。まだ不完全で修正が必要なものもあるように思うが、ひとまず当初の目的は果たすことができたと考えている。

今回取り扱った以外のパラメータ項目やフランス語以外の言語についての同様の問題の検討、分析も行いたい、それは今後の課題としたい。

注

*)本稿は、西日本言語学会第39回講演・研究発表会(京都産業大学, 2009年9月26日(土))における口頭発表をもとに、加筆・修正を施したものである。

1)安藤(1987)では、23項目の対照の基準が立ててあり、古浦(2008)では、それに「高さアクセントを用いているか強さアクセントを用いているか」という項目が追加され、24項目が挙げられている。今田(2009)では、さらに、「名詞・代名詞について文法範疇としての格(case)が有るかどうか」という項目が追加されて25項目となっている。

2)〔表1〕は、Raynaud de Lage(1975), p.61 に示されている古フランス語の指示詞の表から、ここでの説明に必要と思われる語形のみに限って取り出し、簡略化してまとめたものである。

3)〔表4〕は、日本ロマンス語学会第47回大会(北海道大学, 2009年5月30日(土))における口頭発表(「歴史言語類型論的視点から見たフランス語の疑問文」)の際に配付のハンドアウトに掲載し、その発表内容に加筆・修正を施した同名の拙論、今田(2010b)にも掲載予定のものである。

参考文献

朝倉季雄(2002)(木下光一校閲):『新フランス文法事典』, 白水社。

- 安藤貞雄(1987):『英語の論理・日本語の論理 — 対照言語学的研究 —』, 大修館書店.
- 石野好一(2008):『フランス語—文法からコミュニケーションへ—』, 弘学社.
- 今田良信(2002c):『古フランス語における語順研究 — 13世紀散文を資料体とした言語の体系と変化 —』, 溪水社.
- 今田良信(2009):「フランス語歴史言語類型論の試み」, 『ニダバ』, 西日本言語学会(編), 38, pp.1-10.
- 今田良信(2010b):「歴史類型論的視点から見たフランス語の疑問文」, 『ロマンス語研究』, 日本ロマンス語学会(編), 43, 10p. [2010年5月刊行予定]
- 大木充, Franck Delbarre, Alexandre Gras:『パス・パルトゥ』, 駿河台出版社.
- 亀井孝, 他(1992):『言語学大辞典』, 第3巻(世界言語編 下-1)
- 倉方秀憲, 他(2000):『プチ・ロワイヤル仏和辞典〔改訂新版〕』, 旺文社
- 古浦敏生(2008):『日本語・イタリア語対照研究』, 文流.
- 佐藤房吉, 他(1963):『フランス文法小辞典』, 駿河台出版社.
- 佐藤房吉, 他(1991):『詳解フランス文典』, 駿河台出版社.
- 篠田俊蔵, 佐藤房吉(1974):『基準ふらんす文典』, 第三書房.
- 島岡茂(1982):『古フランス語文法』, 大学書林.
- 菅田茂昭(1974):『現代イタリア語入門』, 大学書林.
- 鈴木信太郎, 他(1992):『新スタンダード仏和辞典』, 大修館書店.
- Roberge, Claude, Solange内藤, Fabienne Guillemin, 加藤雅郁, 小林正巳, 中村典子 (2002):『21世紀フランス語表現辞典 — 日本人が間違えやすいフランス語表現 356項目 —』, 駿河台出版社.
- Buridant, Cl. (2000): *Grammaire nouvelle de l'ancien français*, Paris: SEDES.
- Foulet, L. (1980³): *Petite syntaxe de l'ancien français*, Paris, Champion.
- Hasenohr, G. & Raynaud de Lage, G. (1993²): *Introduction à l'ancien français*, Paris, SEDES.
- Marchello-Nizia, Ch. (1999): *Le français en diachronie: douze siècles d'évolution*, Paris, OPHRYS.
- Ménard, Ph. (1988³): *Syntaxe de l'ancien français*, Bordeaux, Bière.
- Raynaud de Lage, G. (1975): *Introduction à l'ancien français*, 9^e éd. revue et corrigée, Paris: SEDES. [大高順雄訳編『古フランス語入門』, 朝日出版社, 1981]
- Vidos, B. E. (1959): *Manuale di linguistica romanza*, Firenze, Leo S. Olschki.
- Wartburg, W. von(1971): *Evolution et structure de la langue française*, 2^e éd., Bern: Francke Berne.
- Yaguello, M. (2003): *Le grand livre de la langue française*, Paris, SEUIL, pp.11-90. (Marchello-Nizia, Ch.: *Le français dans l'histoire*)